



- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |
1. スリップウェア皿 英国 18世紀後半-19世紀後半 9.1 × 40.8 cm
 2. 緑釉水注 (中世陶器) 英国 14世紀 26.7 × 17.3 × 15.3 cm
 3. 藍絵紋章図皿 スペイン 18世紀 8.0 × 42.0 cm
 4. スリップウェア花喰鳥文角鉢 英国 1754年 9.9 × 35.0 × 45.0 cm
 5. コムバック・ウィンザーチェア 英国 18世紀 106.1 × 105.5 × 60.0 cm
 6. 壁画 サマリアの井戸 (部分) スウェーデン 18世紀 123.0 × 104.0 cm



スリップウェア皿 英国 18世紀後半-19世紀後半 6.7 × 32.5 cm

特別展 スリップウェアと西洋工芸

2012年1月7日(土) - 3月25日(日)

Slipware and Western Craft Works

月曜休館 (祝日の場合翌日休館) / 10:00-17:00 (入館16:30迄) / 一般1,000円 大高生500円 中小生200円 / 東京都目黒区駒場4-3-33 / TEL 03-3467-4527 / 京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分 / 西館公開日 (旧柳宗悦邸、入館16:00迄) : 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜日

日本民藝館
<http://www.mingeikan.or.jp/>

特別展 スリップウェアと西洋工芸

スリップウェアとは化粧土（SLIP）を用いて文様を描き、表面にはガレナ釉などを掛け、低火度で焼成する焼物の総称です。日本で一般的に知られているのは、18世紀中頃-19世紀末に実用品として生まれた、縞模様や抽象文、簡素な鳥文などが施された英国陶器でしょう。本国よりも日本で高く評価されてきました。

これら実用品としてのスリップウェアの美を初めて認め、世に広めたのは当館創設者・柳宗悦（1889-1961）と民藝運動を中心的に支えた陶芸家達でした。1913（大正2）年、柳と富本憲吉（1886-1963）は『QUAINT OLD ENGLISH POTTERY』（C・ロマックス著 1909年）という本に掲載されたスリップウェアを見つけ、その存在を知ります。それは主にトフトウェアと呼ばれる作者名の付いた飾皿でした。その後、1920年代初めにはバーナード・リーチ（1887-1979）と濱田庄司（1894-1978）が、無名陶工の作った美しいスリップウェアの実用品を英国で発見します。その感動の輪は、たちまち柳や河井寛次郎（1890-1966）へも広がっていきました。

柳たちは英国では顧みられることのなかった、この雑器のなかに、「作為を超えた実用品にこそ自然で健康な美しさが多く宿る」という事実を、具体的な形として見届けたのです。それは洋の東西を越えた普遍的な美を実感するものでもありました。工芸の本来在るべき姿をそこに見出し、多くの教えを受けたのです。

無名陶工によるこれらの器に触発された柳たちは、執筆や作陶、日本民藝館の活動などにその成果を反映させ、やがて美の連鎖として各地の民藝運動の担い手や多くの作り手に影響を及ぼしました。初期民藝運動の牽引役の一つを実用品のスリップウェアが担ったのです。

さらに柳たちの視線は他の西洋工芸にも向けられ、蒐集をおこなっていきます。それはスリップウェアの場合と同様に既成の価値観や西洋的な見方からは自由な、柳の言葉を借りれば「日本人の眼」で選択したものでした。

柳と富本憲吉がロマックスの本にふれてからほぼ一世紀の時が経ちます。情報化、グローバル化の波が押し寄せ混迷する現在、柳たちが西洋の工芸品に向けた眼差しは、美に関わる者にとって多くの示唆を含んでいると思います。

本展は当館所蔵のスリップウェアを軸として、英国・スペイン・オランダ・フランスなどの陶器・木工・絵画類に、個人所蔵のものを加えた約150点を公開し、柳たちの見つけた美を追体験するものです。

柳は「挿絵小解」（『工藝』第25号1933年）の中で実用品としてのスリップウェアに言及して、次のように記しました。「こう云うものを見ているとどこ迄も英国のいい性質が分る。だが美しいものは不思議である。一方にどこ迄も普遍的な素質が出ているからである。支那のいいもの日本のいいもの等に交えてみて、矛盾がない。登り道は違うが頂きでは皆おち逢っている。地方的にいいものは普遍的にもいい。此神秘が分ればそれでいいのだと思う。吾々は日本に生きようではないか。他の国々と頂上で逢う為に」。

この普遍性を求める柳の精神は、その具現としての当館所蔵品とともに、光彩を放ち続け、今もその輝きを失っていないのです。

記念講演会 私の好きなもの 美しいものを選ぶものさし

〔講師〕坂田 和實（古道具坂田 主人）

日時・3月3日(土) 18:00-19:30 会場・日本民藝館大展示室

料金・300円（入館料別） 定員・100名（要予約）



スリップウェア皿
英国 18世紀後半-19世紀後半
5.5 × 28.5 cm 個人蔵



スリップウェア水注
英国 18世紀後半-19世紀後半
16.5 × 17.5 × 15.0 cm

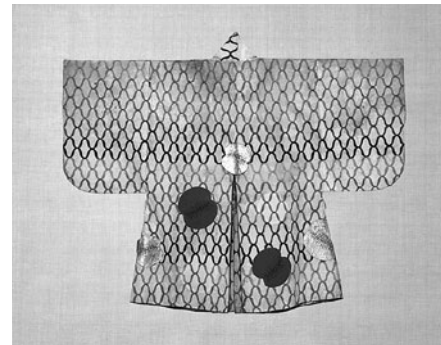
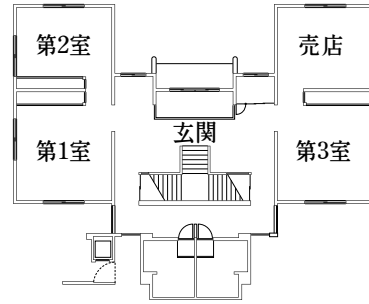


ラスター彩牛文皿
スペイン 17世紀 9.0 × 42.0 cm



ビューロー・デスク
英国 17世紀前半 106.6 × 94.0 × 50.0 cm

展示室 1 階



〔1階第3室〕白地網文様鞠散し革羽織
江戸時代 18世紀 縦105.5 cm

展示室 2 階

〔大展示室・本館及び新館回廊・第3室〕

特別展 スリップウェアと西洋工芸

〔第1室〕朝鮮半島の陶器

一般に絵高麗と呼ばれている、高麗時代に作られた絵付の施された蓋物や鉢。そして、白い化粧土を塗って加飾した粉青（三島手）の碗や壺、雑器の持つ粗野で健康的な美を秘めた井戸茶碗など、当館の所蔵する朝鮮時代の陶器の優品を紹介します。

〔第2室〕日本に継承されたスリップウェア

バーナード・リーチと濱田庄司らの尽力で英国より日本へもたらされたスリップウェアは、日本の多くの陶芸家たちを魅了しました。今回は英国スリップウェアの影響を受けた、リーチ、濱田、河井寛次郎、船木道忠・研兒、武内晴二郎らによる作品を紹介します。

〔第4室〕「祝い」の工芸

当館の所蔵品より、漆絵を施したお椀、螺鈿の菓子箱、吉祥文のお盆などの日本木漆工をはじめ、武家や民間の羽子板、百人一首の歌カルタやうんすんカルタ、三春・鴻巣人形や竹細工の御神酒口など、お正月らしい工芸品を紹介します。

展示室2階第3室は、「江戸の洋風画と泥絵」を展示する予定でしたが、都合により特別展「スリップウェアと西洋工芸」に変更致しました。「江戸の洋風画と泥絵」は、1階第1室「日本の民窯」とともに、縮小展示致します。

〔玄関〕特別展 スリップウェアと西洋工芸

2004年に続くスリップウェアの大きな展覧です。併せて英国の中世陶器やウィンザーチェア等の家具類、スペインの食器戸棚や陶器類、スウェーデンの壁画「サマリアの井戸」、オランダのデルフト窯・藍絵タイルほかを紹介します。多様な西洋工芸の精華をご堪能下さい。

〔第1室〕江戸時代の洋風画と泥絵／日本の民窯

西洋からの舶来画に倣い、画家たちが手探りで描き始めた洋風画。また民間の洋風画ともいえる泥絵は、長崎から上方・江戸へと伝播し、庶民の間にも流通しました。それら江戸期の絵画を、同時代の民窯（日用雑器を焼いた窯）を中心とした日本陶磁の優品と併せて、展示紹介致します。

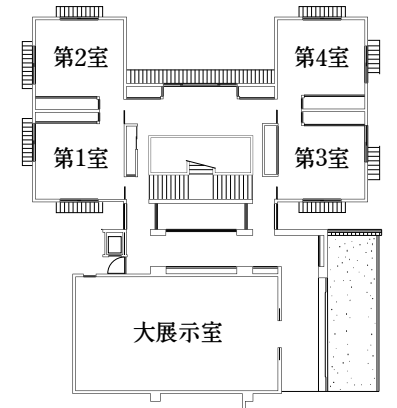
〔第2室〕中国・東南アジアの陶磁

展示期間：1月31日～3月25日（1月30日まで閉室）

明代末期、中国の民窯で焼かれた絵付磁器。それらは、産地や様式により「古染付（染付南京）」「呉須手」「古赤絵」「呉須赤絵」などと呼ばれ、タイの「宋胡禄」やベトナムの「安南」染付とともに、古くから茶人に珍重されてきました。本展示では、それらの民窯陶磁を中心に約50点を紹介します。

〔第3室〕革羽織と刺子 ー火消装束を中心に

三色の網文様に金唐革と赤ラシャの蹴鞠をかがり付けた、江戸時代の武家で用いた革羽織をはじめ、大胆な文字や文様を燻染めした江戸町火消の革羽織、そして厚く丈夫に刺したつぶりと水を含ませて用いた勇壮な染め模様の刺子着など、館蔵の火消装束を中心に展示します。



〔1階第1室〕洋狗図（部分）
2曲1隻 江戸時代 17世紀